

(3) 隠岐調査報告

昭和初期における竹島漁業の実態 関係者への聞き取り調査を通じて

隠岐の島町役場竹島対策室 忌部 正英

はじめに

現在、隠岐の島町では、竹島関係者への聞き取り調査を強化している。近年、聞き取り調査における個別の証言が繋がりをもち、全体像が見えつつある中で、これまで町内において実施してきた聞き取り調査について、得た証言等、成果の一部をここに記したい。

①調査記録

<調査対象者(敬称略・順不同)>

氏名	性別	備考	年度・調査回
佐々木 恂	女	西郷地区住民 祖父が竹島へ出漁	H25-1,H25-2,H25-4, H26-1,H26-3
前田 芳樹	男	久見地区住民 祖父が竹島へ出漁	H25-1,H25-2,H25-3, H25-6,H26-1,H26-2
池田 邦幸	男	久見地区住民 戦後のアシカ漁の漁業権保持者	H25-1,H25-3,H25-4,
池田 京子	女	久見地区住民	H25-1,H25-3,H25-4, H26-1,H26-2
濱田 節夫	男	久見地区住民	H25-1,H25-3,H26-1, H26-2
佃 ミノル	女	久見地区住民	H25-1
中本クニ子	女	久見地区住民 夫が竹島へ出漁	H25-1
福浦 直 懂	男	福浦地区住民	H25-1,H25-3,
八幡 昭 三	男	久見地区住民 父、叔父が竹島へ出漁	H25-1,H25-2,H25-3, H25-4,H25-7,H26-2, H26-3
門脇 正 樹	男	加茂地区住民 祖父が竹島へ出漁	H25-1
赤沼 高 男	男	西郷地区住民 祖父が竹島へ出漁	H25-2
杉原由美子	女	久見地区住民 祖父がアシカの漁業権を所有	H25-2,H25-3,H26-1, H26-2
橋本 三 枝	女	西郷地区住民 中井養三郎縁者	H25-2
藤野 みほ子	女	久見地区住民	H25-3
吉見 一 八	男	中村地区住民 竹島のアワビ殻所持	H25-3
吉見 真須美	女	中村地区住民 竹島のアワビ殻所持	H25-3
八幡 和 憲	男	久見地区住民	H25-3,H26-2,H26-3

八幡邦彦	男	郡地区住民 祖父が竹島へ出漁	H25-3
濱田ヤスミ	女	西郷地区住民 夫が竹島へ出漁	H25-4,H25-7
濱田ヨシ子	女	西郷地区住民 義父が竹島へ出漁	H25-4,H25-7
常角敏	男	西郷地区住民 先祖が竹島へ出漁	H25-5
齋藤昭一	男	西郷地区住民	H25-6,H25-7
八幡智之	男	久見地区住民 祖父が竹島へ出漁	H25-6
木瀬一郎	男	西郷地区住民	H25-7,H26-1
松本英子	女	久見地区住民	H26-1
吉田徹	男	西郷地区住民 祖父が竹島へ渡航	H26-2,H26-3
奥谷寿久	男	西郷地区住民	H26-2,H26-3
吉田はる子	女	西郷地区住民 義父、夫が竹島へ渡航	H26-2
青田まりえ	女	西郷地区住民 父が缶詰工場を経営	H26-4
中西久子	女	西郷地区住民	H26-4
前田緑	女	久見地区住民 父が竹島へ出漁	H26-4

○平成25年度第1回調査（5月30日～6月1日）

土地台帳照合作業（隠岐の島町役場）

明治38年に設立された竹島漁撈合資会社の関係者（代表者）について、当時の資料で判明した住所位置を調査した。

- 周吉郡西郷町大字西町字指向23番地 中井養三郎（自宅兼会社事務所）
- 周吉郡中村大字湊740番地 井口龍太
- 周吉郡西郷町大字西町八尾の2、7番地 加藤重蔵

以上の三名の住所を特定するため、地籍図との照合作業を行い、現在地を特定した。

佐々木恂さん（石橋松太郎氏関係者）調査

竹島開拓のパイオニアとされる石橋松太郎氏の孫に当たる、西郷在住の佐々木恂さんへの聞き取り調査を行った。

- 石橋松太郎氏による初期の竹島における漁業経営実態について、詳細を聞くことができた。竹島での漁業経営では、大幅な黒字を出していたこと、また、収益により山田地区に家屋敷を構えたことなど。
- 今後の計画として、久見地区で座談会を開催してはどうかと提案。久見地区と相談しながら進めたい。

久見地区（漁労関係者、住民）聞き取り調査

久見地区において、関係者に竹島での漁労の状況、当時の地区の状況等を聞き取り調査した。

- 久見地区の橋岡家等による竹島漁撈及び当時の久見地区におけるアシカの目撃・体験談を聞き取り調査した。特に佃ミノルさんによるアシカの証言で、当時の子供たちが日常的にアシカと遊んでいたことが確認できた。
- 橋岡家等によるアシカ漁の証拠として、兵庫県西宮市の水族館（阪神パーク）に久見のアシカの展示が行われていたことが判明。

- 竹島漁撈により財を成した橋岡家が中心となり、地区内のお寺（久養寺）を再建したとの証言があり、現地確認を行った。

久見地区聞き取り

橋岡家に雇われ竹島で漁労を営んでいた中本歆太郎氏の妻、中本クニ子さんとそのご家族に聞き取り調査を行った。

- 聞き取りの中で、中本さんは長年日誌を記していたことが分かった。表紙に、「竹島話に幡村（八幡昭三氏宅）に行きた日 昭和 50 年 4 月 20 日」と記し、赤線で囲んであった日誌を発見した。（日誌内には竹島についての詳細は記載なし）八幡昭三氏に確認したところ、当時、昭三氏と叔父の伊三郎氏を含め、久見地区の竹島漁撈関係者が集まり、竹島の様子、竹島に関する話をまとめ、NHKの取材を受けていたことが判明した。継続して調査する必要がある。

福浦地区（中言神社）調査

福浦地区において、明治 20 年代に竹島で漁撈活動をしていたとされる「八浦屋」について調査した。

- 福浦地区の古老、福浦直愼さんに聞き取り調査を行った。福浦地区に「八浦屋」という屋号の家があり、苗字は「八幡」といったとの証言を得る。（八幡姓の家は他に存在しないとのこと。）現在は、屋号「八浦屋」、姓「八幡」ともに地区には存在しない。
- 中言神社において調査を実施。本殿内部に残されていた棟札により「八幡助三郎」の氏名が判明した。
- 上記とは別件で、福浦では、同じ時期、帆船を使った朝鮮半島との貿易が活発で、朝鮮半島には隠岐の材木を販売し、朝鮮半島へ向かう際には、竹島、鬱陵島を目印にしていたことも判明した。神社には、そうした帆船の所有者が明治 20 年代、30 年代に、鳥居、献灯などを寄進していることも判明した。さらに、45 年ほど前まで、福浦では、帆船での経済活動が盛んだったこともあり、近郷では珍しい神輿をもち、毎年 10 月 19 日、中言神社から、竹島、鬱陵島渡海の際の海上安全を祈願していた、弁天島にある弁天神社まで、船を出して、神輿を担いで祭りをしていたことも判明した。

加茂地区新屋敷（門脇軍一氏関係者）調査

昭和 10 年代に竹島でのアワビ、サザエ漁の記録をまとめた八幡伊三郎さんの記録に出てくる加茂の新屋敷（門脇軍一さん）について、息子の門脇正樹氏に聞き取り調査を実施した。調査の際には、記録のコピーを提供頂いた八幡昭三さんにも同行頂いた。

- 昭和初期には、門脇さんは西郷に在住で、祖父が竹島へ渡航し、カナギ漁をしていたことが判明した。
- 現在の隠岐支庁付近の河口に、アシカの入った木のおりがあったことを記憶していると証言された。
- 軍一さんは、隠岐では有能なカナギ漁師であった。正樹さんは、若い時に軍一さんからカナギ漁を習い、現在もカナギ漁師として活躍されているとのこと。

○平成25年度第2回調査（8月22日～8月24日）

八幡昭三氏聞き取り調査

八幡昭三氏の資料（メモ）に記載されている事項について、聞き取り調査。

- 浜田の北前船（廻船）の寄港台帳を基に、八浦屋（家浦屋）について聞き取り。
台帳には八浦屋（家浦屋）の他に、久見のきどや（前田）、加島屋（橋岡）の名も記載されていた。八浦屋（家浦屋）については、現在福浦地区には家が無い。家が絶えたとも、北方地区へ出たとも言われている。
※八浦屋（家浦屋）…明治20年代に竹島で漁労活動をしたとされる。
- 久見漁協の資料調査で発見した海図について聞き取り。
昭和29年の試験操業時に使用したものであるかどうか調査したところ、確証はないが、おそらく間違いはないだろうとのこと。継続調査の必要あり。
- 八幡昭三氏の資料にある、久見の里屋について、聞き取り。
里屋の主人が竹島にアシカを取りに来た時に、海軍（日本）と写真を撮った。（明治36年）また、海軍とアシカの肉を食べたとのこと。
里屋は現在郡地区に居住しているが、この資料の頃は久見に家があった。
里屋の今の当主の先代（五箇村収入役）の親にあたる人がこの話に出てくる里屋の主人であろう。
- 石橋松太郎組として雇われで竹島漁労に従事していた人物について聞き取り。

佐々木恂さん聞き取り調査

佐々木さんの祖父である石橋松太郎についての聞き取り調査並びに翌日に久見地区で予定している調査中間報告における佐々木さんの思い出話について打ち合わせを行った。以下、石橋松太郎に関する証言。

- 子供の頃に松太郎と共に久見へ遊びに行った。（神楽を見に行った。）久見の親戚（よろずや＝萬屋）へ泊った。板屋（昭三氏の実家）のこともよく覚えている。
- 松太郎が言うには、アワビを採るのに朝鮮か中国の海女を雇っていた。
- アシカの皮は敷物として使っていた。
- アワビを売りに五箇方面へ出かけていたが、あまり売れなかった。
- 穴倉に干しアワビを入れて保存していた。
- 竹島で揚収したロシア人（遺体）を隠岐へ連れて帰り、石橋家に埋葬した。このおかげで山田地区へ家を建てることができた。
- 山田地区へ出てきた頃は、電話は石橋家にしかなく、小路地区のほうからも電話を借りに来る人がいた。
- 23日午後の久見地区での中間報告会の中で、松太郎の思い出話をしてもらうことを確認。（時間は自由）

伊後地区赤沼家調査

伊後の赤沼家で赤沼作次郎氏について聞き取り。

- アシカ漁に従事した赤沼作次郎氏の遺影、位牌を調査し、没年等を確認。
- 作次郎氏の孫、赤沼高男氏の妹さんが、父から祖父が竹島に行った時の話を聞いたという情報を得る。

藤田茂正氏資料調査

旧五箇村の郷土史家である藤田茂正氏（故人）の残した資料の調査。

- 石橋松太郎に雇われて竹島で漁労活動をしたとされる人物について、藤田茂正氏の残した資料（家系図等）を調査し、出身地区名等、ほぼ特定することができた。

久見地区竹島調査中間報告会

石橋松太郎に関する調査の中間報告並びに佐々木恂さんによる祖父松太郎の話を実施した。

久見地区（漁労関係者、住民）聞き取り調査

久見地区在住の濱田節夫氏が、昔、大阪の天王寺動物園で見たというアシカについて聞き取り調査。



- 前回までの調査でこの方が昔、大阪の天王寺動物園に行ったときに、南口のすぐそばにアシカの池があり、そこに八幡長四郎寄贈としたアシカがいたとの証言を得ていた。今回、当時の動物園のパンフレットが発見されたので、確認を行ったところ、南口のすぐそばに「海獣池」なる施設があり、アシカの展示を行っていたことが確認できた。（昭和18年3月）
- 石橋松太郎の親類は、久見の萬屋（よろずや）と西村（湊？）に一軒。このうち萬屋は昔、麴を作っていた。この関係で松太郎は竹島で酒造りを行っていた。

中井養三郎関係者聞き取り調査

中井家縁者の橋本三枝さん宅において、中井養三郎について調査。

- 中井養三郎が政府へ竹島の編入並びに貸下げを願い出る際に、当時政府の農商務省水産局に勤務していた南方出身の藤田勘太郎（板屋）に取り次いでもらった件について調査。

藤田茂正氏資料調査

上述の「藤田勘太郎」について、藤田茂正氏が残した資料により調査。

- 南方に現在板屋という家があるかどうか、地区の方に話を聞いたところ、件の藤田勘太郎の生家かどうかは別としても、2軒ほどあるとのこと。ただし、現在1軒は家屋敷がなく、もう1軒は人が住んでいない。
- 隠岐郷土館に保管してある資料からは発見できず。
⇒藤田勘太郎の生家の特定については、南方地区の古老、藤田茂正氏資料を通じて今後の継続調査項目とする。

○平成25年度第3回調査（9月26日～9月28日）

八幡昭三氏聞き取り調査

八幡昭三氏の資料に出てくる各種事項について追加調査

- 明治20年代に竹島で漁撈活動をしたとされる福浦の八浦屋について調査。
八浦屋の娘が小路の屋号小前という家に嫁に出た。
八浦屋の主人は相撲取りだということを父才太郎から聞いた。
- 海軍の望楼跡について聞き取り調査
伊三郎が海軍望楼跡のコンクリートを見た。
隣の方に土のある個所があり、畑として利用した（ネギを植えた。）と聞いた。
- 竹島で海軍と写真を撮ったと聞く久見の里屋について調査
明治38年頃、竹島において、里屋の主人が海軍と写真を撮ったことについて、
先代の当主から聞いた。
- 天王寺動物園のアシカの映像について聞き取り
天王寺動物園のアシカ（カリフォルニアアシカ）の鳴き声を動画で確認。以前、
久見で聞いた鳴き声とは違う気がするとのこと。

久見代宮屋関係者聞き取り調査

昭和29年5月の最後の漁業権行使の前に、竹島へ出漁した方々が久見の代宮屋に集合した際、代宮屋出身の藤野みほ子さんが体験したことを聞き取り

- 昭和29年5月1日出航の竹島漁業調査（漁業権行使）について
⇒みほ子さんは久見の代宮屋家の生まれ（昭和20年）。父は伊勢命神社の宮司。
⇒みほ子さんが小学校5年生の時、学校から帰ると、母親が急いでみほ子さんの腕を掴んで台所に引き込んだ。その際、「何も言うな」と言われたとのこと。
⇒机の上には高膳があり、瓶子（お神酒の入れ物）と何枚かの杯、お魚が置いてあった。
⇒父親は次の間（奥座敷の手前の部屋）に黙って座っているのを見て、何か普通の雰囲気ではないと感じた。
⇒夜になると、黒い塊（紋付き袴、羽織姿の人達）が、次の間に駆け込んできた。
⇒部屋に入ると襖が勢いよく閉まった。（しばらく静かだった。）
⇒母親が急いで高膳に瓶子、杯をのせて中へ持って入った。
⇒少ししてからまた勢いよく襖が空き、黒い塊（紋付き袴、羽織姿の人達）が急ぎ足で帰って行った。
⇒全てが終わってから2～3日は家の中が暗い感じだった。（笑い話等の明るい雰囲気は無かった。）
⇒何日か経つと、両親が「良かった、皆無事に帰ってきて」と言っていた。
※この体験談は、昭和29年5月1日～4日にかけて、竹島での漁業権行使に出かけた久見漁協の脇田組合長をはじめ、久見の漁師たちが、出発前に久見の八幡宮司に事情を打ち明け、後のことを頼んだ時のものであると考えられる。今後、ビデオ等による記録保存の方法を検討する。

竹島で採れたアワビの殻確認

中村在住の吉見一八氏より、自宅に竹島で採れたアワビの殻があるという情報が

寄せられたため、確認するとともに、入手等の経緯について聞き取り。



- 吉見一八さんと母眞須美さんに聞き取り調査
- サイズ計測・・・横 23 センチ、縦 17.5 センチ、高さ 8 センチ
⇒前回見つけた山田の田中井氏が保有していた貝殻と類似
⇒前回のデータをもとに、舩杉先生が照合作業を行う
- 吉見さんの父が、昭和 16 年から 18 年の間に西ノ島の知り合いから頂いた物とのこと。（知り合い⇒西ノ島町美田の屋号味噌屋（安達和太郎氏））
⇒味噌屋はその昔は網元であったとのこと。西ノ島町での聞き取り調査が必要。

福浦直愷氏聞き取り調査

継続調査事項の福浦の八浦屋について、福浦地区の古老、福浦直愷氏に聞き取り調査。

- 八浦屋について、家の場所、墓の場所、北方地区へ移住した時期を聞き取り。
⇒現在の富屋の裏の方にある墓地との間に家があったと聞いた。
⇒昭和に入ってから北方へ移住した。
- 上記証言をもとに、現地を調査。
⇒八浦屋（八幡助三郎の長男、次男）の墓石を確認。
⇒北方地区へ移住した際に移したのか、墓石は草むらに倒れていた。
※後日、地籍係の台帳で現地を確認したところ、墓石のあった個所の名義が八幡助三郎となっていた。

共同漁業権許可書の確認

9月1日付で許可された、隠岐島漁業協同組合連合会への共同漁業免許状を確認



- 共同漁業免許状の撮影

藤田茂正氏資料調査

久見地区をはじめ、明治～昭和にかけて竹島漁労に携わったとされる方々について、藤田茂正氏が残した資料により調査。

- 聞き取り調査で収集した情報の裏付け作業。

山田地区竹島調査中間報告会

石橋松太郎に関する調査の中間報告並びに佐々木恂さんによる祖父松太郎の話を実施した。

- 石橋松太郎の直系の孫娘である佐々木恂さんによる祖父松太郎の話。
- 石橋松太郎に関する調査の中間報告。
- 山田地区参加者（聴衆）17名。明治30年代の竹島漁撈従事者の資料にある水野屋の関係者が新たに判明。

久見地区調査

池田邦幸氏、池田新之助氏宅において、聞き取り調査。

- 昭和初期の漁労活動従事者の生年没年の確認作業

八幡和憲氏、濱田節夫氏聞き取り調査

八幡和憲氏、濱田節夫氏に対し、昭和29年5月の竹島漁業権行使の際のことを中心に聞き取り調査

- 平成24年度の竹島調査で発見した久見漁協所管の海図について、八幡和憲氏に聞き取り調査
⇒八幡さんは、昭和29年の漁業権行使の時、脇田組合長から、留守番（電話番）をするよう頼まれ、昔の農協事務所に数日寝泊りしていたとのこと。
⇒海図には、隠岐（久見）から竹島へ向かって鉛筆で実線が引いてあり、かつ、帰りの航行の際に使用したと考えられる島前・大山方面への実線（潮流の関係で、当時は真っすぐ久見への線を引かずに、途中から島前と大山を結ぶ方向へ航路を取ったとのこと）が描かれていることから、当初、昭和29年の漁業権行使の際に使用した図かと推察していたが、その数年前（昭和27年頃）に、故浜田正太郎氏が竹島へ燐鉱石を取りに行った際に使用した図との証言を得た。
- 浜田節夫さんに、竹島で採れたというアワビの種類について聞き取り。

八幡邦彦氏取り調査

竹島で海軍と写真を撮ったといわれる久見の里屋（現在は郡）について、この家の現当主八幡邦彦氏に聞き取り調査

- 事前調査で邦彦氏の祖父にあたる源次郎が当事者である可能性があり、聞き取り。
⇒邦彦氏は父静男より話を聞いたことがあるとのこと。
⇒写真は現存せず。
⇒祖父の代までは久見に住んでいたとのこと。
- 没年の確認のため、位牌を調査。

○平成25年度第4回調査（11月14日～16日）

八幡昭三さん聞き取り調査

継続調査を行っていた福浦の八浦屋について、調査報告するとともに、朝鮮貿易などについて、聞き取り。

●朝鮮貿易について

- ⇒石橋松太郎も朝鮮貿易をしていたと聞いた。
- ⇒貿易していた朝鮮の詳しい地名までは分からない。
- ⇒隠岐からは杉皮を持って行った。よく売れたという。

●その他竹島について

- ⇒昭和初期の竹島でのアシカ操業において、朝鮮人4、5名が船でやってきたことがあったが、上陸させなかった。これ以外に大きなトラブルは無かった。
- ⇒八幡伊三郎は昭和9年から竹島へカナギ漁に出掛けた。

●昭和50年に橋岡忠重が朝日新聞に書いたメモをもとに聞き取り。

○竹島に行った吉田屋、泉屋の御主人について

- ⇒この二つの家の御主人が竹島に行ったことは、聞いたことが無い。
- ⇒二つの家ともに久見では有力な家であったが、次第に没落した。

○アシカの油を取っていたという「ハダ」について

- ⇒久見の地名。久見港の北西の海岸のこと。ここでドラム缶や大鍋で油を取っていたのを見た記憶がある。屋号「かまや」のおじいさんが作業していた。

○春はアシカの親、秋はアシカの子を捕り…

- ⇒アシカの親は動物園ではあまり売れなかった。（芸をしないため）子は生まれて3カ月のものを捕った。1年以上たつと芸を覚えない。

○竹島漁労の人数「鮑採りの漁夫三、四名 カナギ 久見 津戸 蛸木」

- ⇒津戸、蛸木で誰が竹島へカナギ漁に行ったかまでは分からない。

●藤田茂正氏資料（明治34年の世帯主リスト）をもとに聞き取り・

○竹島漁業に関与した事業者について

- ⇒竹島は危険な場所であるので、一般的には、そのような場所まで出かけて漁業を行うことは考えなかった。生活に困った人たちが行ったのでは。

明治期の福浦地籍図調査

明治20年代に竹島で漁をした福浦の八浦屋について、屋敷の住所番地を確認。

佐々木恂さん聞き取り

竹島問題研究会において、石橋松太郎の漁労実態の調査発表を行ったことについて報告するとともに、石橋松太郎について追加調査。

●藤田茂正氏資料（明治～昭和初期の家系図）をもとに聞き取り。

- ⇒石橋松太郎氏の父吉六さんは、久見のなかでもそんなに金持ちではないのに、村で困った人を助けるような人であったと聞いている。また、「きりあけさん（山の上の小宮）」の修理もしたと聞いている（かつては石橋家で管理していたが、今は久見の人に管理を任せていると聞いている）。
- ⇒石橋松太郎氏が朝鮮との貿易をしていたという話は聞いたことがない。
- ⇒松太郎氏の長男勝男氏の弟（次男）の斌さん（明治40年生）は、朝鮮（羅南）

で活躍していた。佐々木恂さんの姉の田中井ツヤ子さんは、一時斌さんの養子になったが、松太郎氏の意向で養子を解消した。戦後斌さんは、五箇村の中川建設に入った。

池田邦幸、京子夫妻聞き取り調査

橋岡、池田、八幡家の竹島漁業における役割分担について聞き取り。

- 橋岡家：現場監督。竹島へ行って仕事を差配していた
- 池田家：資金提供（池田吉太郎は資金提供をするが若くして亡くなる）
⇒所有する水田や山林を担保にして、西郷の古木百太郎（前田呉服店）から借金をしたこともある。

※田村清三郎『島根県竹島の新研究』p.103 に、中井家から竹島の漁業権を買い取る際に、古木家から借金をしたことの記載あり。

- 八幡家：会計・外交（アシカの（動物園への）販路開拓などの差配）。
- 池田京子さんの記憶にある西郷の都田さんについて

⇒池田京子さんの実家で、祖父の滝本豊吉さんは、竹島での人夫が足りない時に、八幡長四郎さんから人夫の提供を依頼された。そこで、滝本さんは、知り合いの西郷の都田さんに人夫集めの協力を依頼した。京子さんは都田さんの顔を見た記憶があるとのこと。都田さんをはじめ、竹島に出漁したのは、八尾川の西側にあたる指向の人々だった。指向の人は鳥取県から移住してきた人が多い。都田さんの娘さんは小学校（西郷小学校）時代同級生だった記憶があるが、名前も、その後のことも分からない。

※都田さんは、昭和9年大阪朝日新聞特集記事（第10回）に出てくる「都田佐市」の可能性が高い。記事には、竹島での座談会の参加者として「池田宰領方」、「柘田定蔵さん、都田佐市さんほか三人の漁師」の記載あり。今後の追跡調査の予定

※上記の「池田宰領方」は、別の久見の池田家の可能性もあるので（屋号中田屋）、今後調査予定。

※橋岡忠重メモでは「出漁の折りのアシカ取り漁夫七、八名、大体西郷の漁夫、鮑取の漁夫三、四名、カナギ、久見、津戸、蛸木、大体は朝鮮のアマを連れて行きました」とあり。

- 島の呼称について
⇒大阪朝日新聞特集記事では「リャンコウ」と書いているが、久見の人々は「ランコ」と呼んでいた
- 橋岡忠重メモにある「吉田や主人」、「泉や御主人」について
⇒久見では家の格は高くない。従業者（雇われ者）として竹島に行っただけと思われる。橋岡忠重氏より年上だったので、メモで尊敬語を使用したのではないか。
- 竹島でとったアシカ（子供のアシカ）は船に12～13頭、15頭を積んで帰ってきた。大人のアシカをとったという記憶はない。ただし、時々4斗ぐらいの樽にアシカの肉が入って、それを倉庫で保存していたのを見た記憶がある。それを時々食べたことがあった。
- 昭和10年代後半には、30馬力の船で竹島に行っていた

●久見でカナギ漁の名人は、八幡伊三郎、八幡尚義の二人で、二人とも戦前に竹島での操業の経験がある。

●森山缶詰（西郷）について

⇒森山缶詰の親会社は、京阪神の竹中缶詰で、竹中缶詰が資金を出し、森山家の家、工場を建てた。隠岐や竹島のサザエを集め、サザエの缶詰を作っていた。缶詰の殻は隣のボタン工場にいき、ボタンに加工された。工場にはサザエの殻の山があった。経営者は森山秀之助氏である。森山氏の母は竹島に行き、まかないをしていた。戦争後昭和 25,6 年頃には工場をたたみ（隠岐周辺でサザエの資源が枯渇したため）、東京へ移ったと聞いている。西郷には、森山さんの娘さんがいると聞いている。

⇒竹島ではサザエをとった後、しばらく水につけ 1 週間程度生かしておき、西郷に運んだ後、工場ですぐ味付けして缶詰にした。工場には、大きな釜が並んでおり、それをたきぎで燃やして、サザエのなかみを取り出し、釜に入れて味付けして、缶詰に入れていた。

●西郷の実家には、八幡長四郎氏からもらったアシカの油で作ったやけどの薬があった。瓶詰めしてあったが、当時大変臭かったことを記憶している。

●養子で池田家に入った池田幸一は体が弱かったと聞いており、竹島に行ったとは聞いていない。

※昭和 9 年大阪朝日新聞特集記事（第 10 回）に出てくる「池田宰領方」は別の家の可能性が高い。今後の追跡調査の予定

●橋岡友次郎氏について

⇒友次郎が池田家から橋岡家へ養子に行った時には、橋岡家は、久見の開拓地に住んでおり、経済的に裕福ではなかった。竹島漁業のために久見に移り住んだ。

金峰荘女将さん聞き取り

●カンコ船を寄贈いただいた濱田ヤスミさん、濱田ヨシ子さんに、浜田正太郎さんが竹島へ燐鉱石を取りに行ったときに使用した海図を見てもらい、聞き取りをした。

●中山式カンコについて

⇒設計図について、将来的に役場等へ寄贈したい。（家族と相談する）

●浜田ヤスミさん…竹島の和布を食べた。（海面から更に横に伸びていた程の長さ）

●船の名称（伊勢命神社の文字をとって）…伊勢丸

○平成25年度第5回調査（12月14日～15日）

竹島に関する古地図調査

個人所有の西洋古地図、日本古地図の内、竹島（松島）や麿陵島に関する記載のあるものについて選別し、了解を得て調査。（目録及びデータ化）

⇒総数30点余り

常角 敏氏聞き取り

中井養三郎組として竹島で漁撈活動をしていた常角芳市、西阪伊勢次について、聞き取り調査。

●西阪伊勢次について

⇒常角先生の家は、屋号を中前という。四代目までは西坂という姓だった。

⇒西阪伊勢次郎（資料では坂⇒阪、伊勢次郎⇒伊勢次）は4代目。養子をもろらうがその養子（常角勝太郎）から常角姓を名乗る。

●常角芳市について

⇒上記にある、中前（西坂）家に養子に入った常角勝太郎の家は、屋号を富屋という。この勝太郎は富屋家の四男で、次男に常角由吉という人物がいた。鉄砲撃ちであったという。

⇒由吉は屋号小畑屋という家に養子に入る。小畑屋は代々鉄砲撃ちとのこと。

⇒親戚に竹島で漁をした人がいる、その人は鉄砲撃ちだったと聞いたことがあるとのこと。

⇒由吉、勝太郎の兄妹で、末の妹のセキの孫にあたる方に急きょ同席頂き、聞き取りを行った。

⇒セキおばあさんから、自分の兄弟が竹島に行ったことがあると聞いたことがある。大きなトドをとったことがあるとか、トドから肉や油をとったとか、大きなワカメを採って岩の上に干したことがあると聞いたことがあるとのこと。

⇒以上のことから、竹島に渡った常角芳市は由吉の間違いと考えられる。（他の渡航者の中に現在のところ、常角姓はこの「芳市」以外に見つかっていない。）

○平成25年度第6回調査（2月6日～8日）

齋藤昭一氏聞き取り

昭和初期のニホンアシカ出荷について聞き取り

- 齋藤町議が、母から聞いた話として、橋岡家が捕ったアシカを大阪の天王寺動物園などへ出荷していたとのこと。その当時（昭和初期）の当主は、祖父である富太郎氏（昭和25年7月16日没）。おそらく橋岡氏と、アシカの値段の交渉など大阪の業者とを取り次ぐ役割をしていたと考えられるとのこと。西郷港からはおそらく運搬船に載せて輸送されたと考えられる。
- 橋岡氏は、本土へ渡る際には必ず齋藤家に一泊し、翌朝の船で出立していた。町議が幼いころ、橋岡氏にお小遣いをもらう等可愛がってもらったとのこと。
- 齋藤家は、明治から昭和にかけては隠岐の島町西町に家があり、貸金業や各種物品の間屋、塩の専売など様々な業種をこなしていた。港町で海産物の缶詰工場も経営していた。
- 齋藤家の屋号は、柏屋で、江戸初期の西郷の検地帳に記載がある。さらに過去帳によれば、初代の道円は寛永14年（1637）没としている。途中断絶した時期もあるが、家は続いた。
- 昭和初期に久見の橋岡忠重氏が竹島で捕獲したニホンアシカは、神戸の動物商中田氏を通じて、関西方面の動物園、水族館、サーカス団に売られていたことは、これまでの久見地区を中心とした聞き取り調査で明らかになっていたが、具体的に久見からどのような方法で関西地方へニホンアシカが輸送、販売されていたのか具体像は未解明であった。これまで複数の関係者から西郷港近くの浜で、ニホンアシカを入れた木のおりが、船（輸送船）が来るまで置いてあったとの証言を得ていたが、これで点と点がつながり、ようやく線となったといえる。

八幡伊三郎氏自宅調査

昭和8～16年頃にかけて、竹島でカナギ漁を行った八幡伊三郎氏について、氏の日記、写真の調査を行った。

- 八幡伊三郎氏の家は、屋号を『新屋敷』という。
- 現在八幡家には、孫の智之さんご夫妻が居住。
- 竹島で漁業を行っていた年代の日記は存在しなかったが、他の年代の漁業日記を含め、氏の帳簿類等資料を借用。また、伊三郎氏の写真を数点借用し、データ化した。（伊三郎氏については、日記のコピー、手書きの地図はこれまでに確認していたが、本人の写真は初めて確認した。）
⇒後日、竹島で漁業を行っていた年代の日記が二階から発見され、町に寄贈いただいた。
- 八幡家の蔵には、伊三郎氏が使用した箱メガネが3点保管されていた。3つの箱メガネの形状の違い、屋号の『新』の文字の焼き印、伊三郎氏は道具を大事にしていた、漁師は地元で使っていた道具を竹島でも使っていた、箱メガネは通常20年程度は使用するという証言、昭和30年代の伊三郎氏の写真にあった箱メガネから推測すると、この3点の内、最も古い箱メガネは、竹島で使用された可能性が高い。（竹島で使用された可能性のある漁具はこれまで未発見）

○平成25年度第7回調査（3月29日～31日）

八幡伊三郎日誌調査

前回調査の後、八幡伊三郎氏が竹島でカナギ漁をしていた年代を含む複数の日誌類が町に対して寄贈されたため、内容について調査。

- 日誌類を調査した結果、昭和11年に2回（6月7日～22日、9月11日～21日）、昭和12年に1回（5月29日～6月16日）、昭和13年に1回（5月13日～6月15日）竹島に渡航し、カナギ漁を行っていたことが判明。（計4回）
- 日誌類には、毎日の天候や漁獲量が事細かく記載されている。昭和11年の6月期は、アワビ600kg、9月期はアワビ427kg、昭和12年にはアワビ1470kg、昭和13年にはアワビ564kg、サザエ1417kgの漁獲量が記されており、竹島の豊富な資源の様子がうかがえる。
- 上記漁獲量のほか、昭和13年の日誌には森山伍詰士が同行したことや、竹島でアシカ猟が始まるのは5月末からで、それまではアシカ猟の夫夫とともに、和布刈りをしていた。和布刈りは八幡伊三郎氏と、同じかなぎ漁師の加茂の新屋敷が行い、アシカ猟の夫夫は和布干しをしていたことなどが記されていた。昭和11年の記録によると、八幡伊三郎氏が6月13日から15日までトド（＝アシカ）を入れる箱づくりをしているなど、当時の様子が明らかとなってきた。
- 竹島での漁期以外の記述では、近所の方ヘランコ（久見地区における竹島の呼び名）土産を配ったこと、竹島で獲った物を神社の祭りに奉納したことなどが記されており、竹島と地区との深いつながりを伺わせる。

齋藤昭一氏所蔵資料調査

齋藤氏の所蔵する資料の中に、久見の石橋松太郎が何らかの資金を借用した証書が見つかる。竹島漁撈との関連性については継続調査とする。

金峰荘聞き取り

金峰荘の濱田ヤスミさん、濱田ヨシ子さんに、濱田正太郎氏が戦後、リン鉱石を求めて竹島へ渡った際の様子を再度確認。

八幡昭三氏聞き取り

上記の八幡伊三郎氏の日誌、漁具について確認の為に再度聞き取り調査を実施。

木瀬一郎氏聞き取り

旧西郷町港町に鎮座する水祖神社の寄付者名簿（大正11年7月）について、中井養三郎の氏名があることから聞き取り調査。また、水祖神社境内にある玉垣の調査を行ったところ、中井養三郎の氏名が彫ってある玉垣が発見された。当時の中井家の経済状況を示す資料として、継続調査を行う。



○平成26年度第1回調査（5月15日～16日）

木瀬一郎氏聞き取り

中井養三郎を含めた大正11年の水祖神社寄附者について聞き取り

- 港町（指向）の住民のルーツについて。港町（指向）は鳥取県からの移住者（漁業者）が多い。菊本源太郎、柘田定蔵ほか竹島漁撈合資会社報告書や新聞記事に出てくる人々について聞き取りを進める。
- 中井養三郎が設立しようとした製氷工場（後に西郷町が建設、漁業協同組合が運営）について、所在地を聞き取り。
⇒現在のプラザホテルの位置。（西郷町港町天神原75番地）
- 上記製氷工場に関連し、西郷での底引き網について聞き取り。
- 竹島のサザエを加工していた森山缶詰について位置を聞き取り。
⇒現在のプラザホテルの南側。
- 大満寺本堂建設寄進帳調査（港町指向の住民）
- 昭和5年西郷町の戸籍筆頭者名簿について調査。
⇒竹島漁業に関連する氏名数点確認。
- 水祖神社写真（大正10年頃）を借り受ける。データ化の予定。

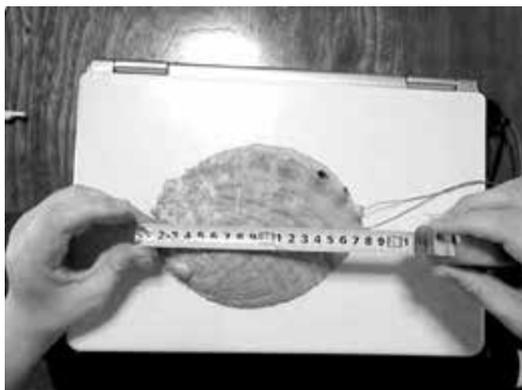
明治期の地図調査

上記製氷工場の所在地や竹島漁撈合資会事務所や役員の加藤重蔵の住所等を地図で確認。

- 地図は「明治22年8月調製周吉郡西郷町地図」（議会事務局所蔵）で明治中期までの西郷町の地図が地番地目入りで描かれている。
- 地図は劣化が激しく、今後早い段階でデータ化が必要。

松本英子さん聞き取り

八幡伊三郎日誌（昭和12年6月）に記載のあるランコ土産を配った家の一軒である久見地区の松本家で聞き取り調査。



- 日誌中の屋号「松本」が2軒あることについて確認。
- ずっと家（昭和30年建て替え）に飾ってあったアワビ殻（上記写真）について、松本英子さんは竹島のアワビと聞いていた。
- 八幡伊三郎さんは漁に出るときは松本の前を歩いて海へ出ていた。小柄なおじいさんだった。

伊勢命神社現地調査

久見地区の伊勢命神社拝殿及び境内で、石塔類の寄進者について調査。

- 鳥居、石塔等の寄進者名を確認しようとしたが、石材の劣化、光の当たり具合で判読できなかった個所が多数あり、継続調査が必要。
- 随神門の内部に棟札を確認。世話人として「伯耆國東伯郡赤碕」の「入江」という人物の記載あり。久見地区の関係者に追跡調査の必要がある。
- 拝殿内で額縁入りの写真を確認。



久見地区聞き取り

久見地区の関係者（池田京子さん、前田芳樹氏、濱田節夫氏ほか）に、森山缶詰工場、伊勢命神社の石碑・随神門、拝殿にあった船の写真等について聞き取りを実施。

- 森山缶詰工場の敷地全部にサザエのふたが敷き詰めてあった。工場の前、従業員のご飯を炊く小屋等も同様。
- 伊勢命神社拝殿にあった船の写真については、八幡伊三郎氏の船（開平丸）とのこと。用途は木材運搬。濱田節夫さんがこの船に乗せてもらい、境港まで行ったとのこと。
- 随神門の中にある棟札に、世話人として「伯耆國東伯郡赤碕」の「入江」という人物について
⇒濱田節夫さんの先輩で、水産学校に入江姓がいた。竹島渡航メンバーにも入江姓あり。継続調査が必要。

佐々木恂さん聞き取り

石橋松太郎氏に関する追加聞き取り調査を実施。

- 松太郎の妻は西村の屋号「坂」からきた。（坂田熊一の長女つね）松太郎と一緒に3人で中村のまつりを見に行った。
- 竹島での漁業はお金がかかったので、田畑を売ってお金を捻出した。
- 松太郎直系の石橋家の長男が病気で亡くなった。先日葬儀で五箇を訪れた際に、松太郎が持ち帰ったと言われる竹島の石の話になった。現在も山田の石橋家にあるとのこと。

○平成26年度第2回調査（6月26日～27日）

吉田 徹氏聞き取り

大阪朝日新聞昭和9年連載記事にある竹島に渡っていた吉田重太郎（神福丸）について聞き取り



漁船 神福丸（昭和9年）
（大阪朝日新聞）

●吉田重太郎と神福丸について聞き取り

- ⇒徹氏は重太郎の孫で、吉田家は鳥取県賀露の出身
- ⇒上記のイラストは徹氏が記憶をもとに神福丸をスケッチしたもの
（記憶では、船の長さは20m、幅は5m、13トン、1気筒40馬力くらい）
- ⇒神福丸は、当時西郷で一番大きい船だった
- ⇒カンコは横にして船の前部に積載した
- ⇒竹島の写真（下記）で、左から二番目の人物が吉田重太郎氏



神福丸の漁業

- 底引き：カニ、カレイなど
- ウタセ（刺し網）：アジ、サバ
- 漁船には6～7名の乗組員

竹島渡航について

- 西郷から久見に寄港し、食糧（米、野菜、水）を積んだ
- 久見で波の状態を見て出港した

※本調査後、第3期竹島問題研究会の藤井賢二氏による調査の過程において、農林省水産局編『昭和十二年 動力附漁船々名録』（東京水産新聞社発行 1937年）に神福丸の記載があることが判明。同録には、船名「第一神福丸」、漁業別「機船底引」、トン数「12」、船主氏名「吉田重太郎」等の記載があり、文字資料と証言が概ね一致していることが分かった。

●アシカの木の檻について

- ⇒帰港した神福丸の傍にアシカの木製の檻があった
- ⇒場所は現在の中国電力隠岐営業所付近
- ⇒鳴き声（ウオーウオー）を聞いた

●中井養三郎家について

⇒徹氏が松江中学校に入学した際、中井養一氏に仮の保護者になってもらった

⇒養一氏は水産関係で忙しく、会ったことはない（松江の北堀町にいた）

⇒徹氏は基本的には寄宿舍にいたが、時々中井家に行った

⇒養三郎の妻（セツ）と一緒にコタツにあたった

●その他について

⇒父喜正から八幡長四郎の話を知ったことがある

⇒天王寺動物園に3頭アシカを寄贈したときに新聞記事に重太郎が載った

⇒トド（アシカ）の油で作った傷薬（小さな缶）があり、小さいときに塗ったことがある

⇒漁船の乗組員として都田という人が乗っていた

八幡昭三氏聞き取り

石橋松太郎、浜垣豊造、八幡荒市について聞き取り

●石橋松太郎の酒造り（税務署対策で竹島渡航）

●浜垣のアシカの油で作った薬（アカギレに塗った）

●久見にいたアシカ（メチ）の話について聞き取り

久見地区聞き取り

久見地区の関係者（八幡和憲氏ほか）隠岐及び竹島における潜水漁業について聞き取り

●久見では戦前、西郷の齋藤グループ（雇われで南方の安部）と徳島の神野グループが機械式潜水漁業を行っていた

⇒神野グループは一時竹島にも行って潜水漁業をしており、久見の脇田茂氏が雇われていたとのこと

⇒郷土館に展示してある竹島の石は脇田茂宅の庭にあったもの

●昭和29年の最後の漁業権行使について聞き取り

○漁業は男島と女島の間、水深3～6mのところで行われた

○帰りに標識を立てた「島根県隠岐郡五箇村」

○集合写真は別府で撮影

⇒写真は「しまかぜ」だが、実際には「へくら」で竹島まで渡航した

○5月に漁獲した理由は・・・

⇒4月は久見ではわかめ刈りが忙しいので、その後の方が都合がよかった。気候も安定している。

○ある家庭では出漁についてトラブルがあった。（死に別れになる可能性から）

○渡航した河原春男によると、竿をたらずとすぐに魚（ボッカ）が食いついてきたとのこと。

○渡航者の中で、実際に竹島へ行ったことがある者は、佃祥次郎・前田峯太郎の二人だけで、八幡伊三郎はいなかった。

○八幡尚義は若いが実績があったので連れて行った。（前田峯太郎氏の話）

●竹島周辺でのイカ釣りについて聞き取り

- 昭和 50 年頃、西郷港町の吉田あつしが集団で泊りがけの出漁を行っていた。
⇒当時の船の速度は 22、3 ノットで、5 時間くらいかかった

奥谷寿久さん聞き取り

昭和初期の隠岐の島における底引き網漁業について聞き取り

- 奥谷さんの祖父・父が底引き網漁業を行っていた
 - ⇒船は昭徳丸 20 トン（後に恵長丸 75 馬力）
 - ⇒奥谷家は鳥取県岩美町羽生の出身
 - ⇒隠岐の周囲で漁業（カレイ、カニ）
 - ⇒昭和 28 年に商売をやめた
- 昭徳丸で竹島に行った
 - ⇒竹島でトド（アシカ：サーカス用）の入った箱を運搬した
 - ⇒トドの入った箱は、奥谷家の裏に揚げていた（昭和 10 年代頃）
 - ⇒船の船頭は都田佐市氏

※本調査後、第 3 期竹島問題研究会の藤井賢二氏による調査の過程において、農林省水産局編『昭和十二年 動力附漁船々名録』（東京水産新聞社発行 1937 年）に昭徳丸の記載があることが判明。同録には、船名「昭徳丸」、漁業別「機船底引」、トン数「9」、船主氏名「西郷町漁業組合」等の記載があり、文字資料と証言が概ね一致していることが分かった。

吉田はるこさん聞き取り

吉田重太郎の次男吉田清次氏の妻（大正 9 年生まれ、※吉田徹氏の叔母）吉田重太郎の代わりに船頭を務めた吉田清次氏について聞き取り

- はるこさんの旧姓は佐々木で、生家は吉田重太郎の家の隣
- 昭和 14,5 年頃に 20 歳で清次さんと結婚
 - ⇒結婚後は清治さんとともに北京へ移住（清次さんは外務省）
 - ⇒終戦後に帰国、清次さんは底引き網漁業を始める（明徳丸）
- 清次さんが 18,9 歳のころに竹島へ行ったと聞いた
 - ⇒背丈くらいの松 1 本を背負って竹島に上がり、岩の上に植えた
 - ⇒重太郎が調子が悪いときは船長代理として竹島へ行った
 - ⇒一度ではない
- 竹島のトド（アシカ）について
 - ⇒竹島から運んできたトド（アシカ）を見たことがある
 - ⇒丸太で作られた木の檻に入っていた（檻は 3 つで、1 頭ずつ入っていた）
 - ⇒牛みたいで茶色だった
 - ⇒鳴き声（ウオーウオー）を聞いたことがある
 - …行儀が悪いと、父から「新道（吉田家の屋号）のトドに食わせるぞ」と叱られたことを覚えている
 - ⇒吉田重太郎氏からどんぶりのような形の巻貝（にな）をもらった
 - ⇒中井養三郎氏は覚えている（顔を覚えている）
- アシカの木製の檻が浸かっていた場所を聞き取り
 - ⇒港町集会所の前の方（中電隠岐営業所寄り）で、現在は埋立地となっている。

○平成26年度第3回調査（8月23日～24日）

佐々木 恂さん聞き取り

石橋松太郎による竹島での漁業等について追加聞き取り

●竹島での酒造りについて

⇒酒づくりの麴は、麴を扱っていた久見の萬屋（よろずや）から入手した。

万屋には、石橋松太郎の妹が嫁いだ。

※藤田資料「サク」明治6年4月16日生 萬屋 又一妻

⇒酒づくりの際には、別の島（西島？）の水を使用した。大変いい水であった。

⇒久見でも酒をつくっていた。大きな桶があったという。検査に来る時には隠したという。

●竹島での漁業について

⇒朝鮮から海女を7名雇っていた。（※資料的裏付けは無し）

⇒アワビは身に穴をあけて、かずらに通して干した。干すと1年は腐らなかったという。

⇒恂さんの姉（父石橋勝男の長女）が聞いた話で、松太郎は、干アワビの外国への輸出を考えていたと聞いたことがあるとのこと。

奥谷壽久さん聞き取り

奥谷氏所蔵の資料等について調査



○昭和初期に竹島渡航の経験がある都田佐市の出てくる資料の確認

⇒昭和17年から昭和24年頃の経営帳簿（昭徳丸関係）

⇒昭和20年代後半の経営帳簿（恵長丸）

経営帳簿

- ・打瀬網（＝底引き網のこと）については、7～8月は休み。（カレイ、カニ、キス、タイなどをとる）

※戦中の打瀬網に出てくる人々（6名）

大西：機関長

都田：都田佐市

大田：

空カジ屋：

保一：奥谷。父榮市のいとこ

坂木屋：茂松富三郎船の乗組員、竹島渡航者

- ・昭和17年には「臨時船員部」として、5月15日までと、10月から18年5月まで賃金をもらう記載あり。
- ・網を引っ張ったり、魚を引きあげたり、船上で魚を選別したりするなど、6～7名の人員が必要（四ツ張網も同様）
- ・資料によく出てくる石田：中村の人。恵長丸をつくろうとしたが、途中で資金難になり、出資の話を持ちかけられた。
- ・船中決め（せんちゅうぎめ）：正月3日に、1年間船に乗るかどうかを決める。決めた後、酒を飲む
※資料には「網子定」と記される。
- ・鰹網＝刺し網と考えられる。サバ、アジをとる。
⇒資料には6～8月中とある。
- ・イカ割＝イカをスルメにすることを指すと考えられる。
- ・小船四ツ張網では、小船が10隻ほど必要となる。

●その他聞き取り

⇒父の榮吉さんが竹島に行ったかどうかは分からない。榮吉さんは、油の手配など丘船頭であった。昭徳丸の船頭は、都田さんだったので、都田さんが竹島に行った可能性が高い。

⇒奥谷家の次女良子さん（壽久さんの姉）の話

- ・竹島からのもの（土産）を都田さんからたくさんもらった。
○トドの油やけどの薬、1斗缶に入っていた。
○アワビなどの貝殻（今は残っていない）
- ・10歳前後の頃におりに入った竹島のアシカを見たことがある。

⇒漁業権関係の資料が他にあるとのこと。

※本調査後、第3期竹島問題研究会の藤井賢二氏による調査の過程において、鳥取県内務部商工水産課編『昭和九年八月 鳥取県水産要覧』に戦前の日本海西部の機船底曳漁業の休漁期は隠岐周辺の禁漁区域と浜田沖を除いて6～8月であったことが記載されていることが判明。奥谷氏の打瀬網に関する証言と文字資料が概ね一致していることが分かった。

吉田 徹氏、吉田はる子さん聞き取り

神福丸船長吉田重太郎氏、吉田清次氏について聞き取り

●重太郎が、「神戸から親方が来る」と言っていたのを聞いた。

⇒その際は、八幡長四郎さんも来ていた。

⇒「だんな」が来るので家の外に出るように重太郎に言われた。

⇒「だんな」は背広を着ていて、当時としては珍しかった。

⇒新道（吉田家）の家の真ん中の部屋に集まっていた。

●トド（アシカ）の油で作った傷薬が家にあった。

⇒傷薬が入っていたのは、缶ではなく、ビン（茶色）だった。

⇒冬のあかぎれなどに使用した。

⇒後に、これを商品化した人もいた。

●吉田清次（重太郎氏の次男）さんについて

- ⇒背丈くらいの松の苗（1 m、1 本）を移植するため、島の上まで斜めに背負って言った。
- ⇒重太郎とともに、機関士として竹島へ行った。
- ⇒重太郎の引退後、船長として2回ほど竹島へ行った。
- ⇒西郷で漁があるので、竹島には夏の休漁期間に行った。

八幡昭三氏聞き取り

石橋松太郎についての聞き取り及び新資料調査

●石橋松太郎の話（竹島での酒造り）

- ⇒石橋松太郎と八幡才太郎（昭三さんの父親）はふたいとこであった。
- ⇒石橋松太郎はよくケンカの仲裁に入っていた。そのため村内では反感を持つ者がおり、松太郎が自宅でどぶろくを無許可でつくっていたところ、反感を持つ者から税務署に告発され、税務署につかまり、多額の罰金を科せられた。
- ⇒石橋松太郎は頭の切れる男であった。米 15,6 俵と酒造りの道具を竹島に持って行って、竹島で酒をつくった。酒は隠岐に持ち帰って売り回った。よく売れて儲かったという。
- ⇒竹島での酒づくりでは、最初人夫に日当を払っていたが、2,3 年目になると、松太郎は日当を払わなくなった。そこで人夫は、給料のかわりに、酒を飲むようになり、仕事をしなくなり、酒造りもアシカ猟もできなくなり、困った。松太郎は、アシカ猟や酒造りなどいろんな事業に手を出しており、資金が必要となり、日当が支払わなくなったと考えられる。
- ⇒竹島へは星を見て航海した。

●石橋松太郎と鬱陵島の関わり

- ⇒松太郎は明治 20 年始めごろは、アシカの皮肉を朝鮮へ売っていた。その見返りは陶器であったが、隠岐の田舎では価値が判らず、収入は少なかったが、鬱陵島とか朝鮮では非常に感謝されていた。
- ⇒松太郎は鬱陵島へ行くと、朝鮮人より色々相談を受けてものすごい人気者であったとのこと。困った朝鮮人を、感心するほど助けた。我々日本人にはあんなに大事にしないのに、朝鮮人には不思議と優しくかった。
- ⇒八浦屋と石橋松太郎は鬱陵島で杉皮を売った。鬱陵島には金持ちはあまりいなくて、高く売れたようだが、大してもうからなかったらしい、見返りに陶器をたくさん持ち帰ったが、久見では美術品の価値が判らなかったので、本国の方で売った。それでも、何回となく行ったとのことだった。
- ⇒松太郎は竹島にいる時は鬱陵島へは再三行って島の様子を見ていた。大きい木が茂っているなど感心していた。どぶろくを作っては鬱陵島へも売りにいった。見返りに匂いの良い木を得ていた。松太郎が朝鮮から持ち帰った匂いの良い木が板屋にあった。鬱陵島の木を切り出すことになり、松太郎は協力して隠岐から樵の人夫を大勢連れて行った。結果、鬱陵島には日本人学校ができた。久見の後の池田カネ子は卒業生である。鬱陵島には朝鮮人は大勢いたが、全く問題なく、松太郎は尊敬されていた。

- 竹島領有権問題の解説資料（表紙なし、年代不明）
 - ⇒1枚目脱落、2～6枚目のみあり、内容ははじめに、1. 竹島の概要、2. 竹島の領有の根拠、3. 竹島問題の経過、4. 竹島へ行った人々（八幡才太郎氏、八幡伊三郎氏）、八幡伊三郎氏が亡くなった昭和63年が最も新しい年代であるので、昭和63年以降の資料であると考えられる。
- 写真コピー「リヤンコウ全景」（西島、東島の記載があるが、表示が逆となっている、年代不明（昭和9年か?））。
- 山陰中央新報1996年（平成8年）2月23日（金）記事「島根県五箇村竹島緊迫する日本海（2）」1992年（平成4年）5月20日、島根県漁業取締船「清風」で、県議会農林水産委員会の有馬県議ら3名、県職員、県漁連幹部が竹島に向かうが、竹島まで20海里で、韓国海軍護衛艦が現れ、断念したという内容。
- （表題なし）橋岡忠義さんメモのコピー（久見山田線の一級村道への格上げ（昭和46年）、防災工事（昭和33年の大時化で久見海岸のつじが破損）、佐藤総理へ陳情に行った理由）。

八幡和憲氏聞き取り

昭和初期の久見地区について

- （竹島に向かう大型船に）久見から最低、小船2艘（アシカ猟のため）を載せていた。
- アシカのおりについて
 - ⇒アシカのおりを久見川河口で見たのは、小学生であった昭和12年、昭和13年頃。
 - ⇒ゴズ、ウグイ、ボラを釣って、おりの中にいたアシカに魚をやる悪さ（遊び）をよくやっていた。
 - ⇒魚をやると、アシカ（成獣）は「ウー」といって喜んでた。
 - ⇒アシカのおりは、最低2つはあった。
 - ⇒アシカのおりには、子供のアシカがいた。また大人のアシカ（成獣）がいた。
 - ⇒久見川河口に、アシカのおりは、短ければ半月程度、長ければ2か月ぐらいはあった。（動物商が久見の漁師との）契約が成立すること、また（動物商が）アシカの生育状況を直接確認する必要がある。
 - ⇒子供のアシカがたすき掛けをして放し飼いになっていたという話（佃ミノルさんからの情報提供）については分からない。
 - ⇒アシカのおりについて記憶があると考えられる人物は下記の通り。
 - 野津岸郎（きしろ）さん（昭和3年生） 板屋の隣、重屋
 - 前田緑さん（大正14年生）
 - ・川のそばに住んでいた
 - ・前田町議のお母様
- 八幡伊三郎さんから直接聞いた話
 - ※八幡昭三さんのお宅で出てきた八幡伊三郎さんからの聞き書きのプリントをもとに聞き取りを行う。
 - ⇒蒲団がないと寒くてやれない（寒くておれない）。隠岐よりも寒かった。

- ⇒5月頃では夜は冷えることがあった
- ⇒5月頃を過ぎると、夜冷えることはなくなった（5月頃）
- ⇒5月頃：4月のワカメ刈り（久見）の後に竹島へ出かけていた。
- ⇒久見でのワカメ漁について
- ・ワカメが大きな収入源
 - ・人によっては、年収の半分にもなった
 - ・時期：3月末から4月
 - ・「ワカメ共済」水揚げが減った時に補填する仕組み
- ⇒竹島に行く船には、水を積んだ。水を積むと船が揺れなかった。
- ⇒島の上（一番高いところ）に大きなグミの木が1本あった
- ⇒グミの木から岩を伝って、小屋の近く（東島）に水がしたたれ落ちていた。ここに桶を置き、水を貯めていた。飲料水として利用した。竹島で水が出るのはここ1ヶ所しかなかった。
- ⇒鬱陵島から竹島に来る人もいたので、前にあった（利用されていた）小屋を修理して、その小屋を利用した。伊三郎さんは桶屋もやっていた。板を削る技術もあったので、その小屋は、伊三郎さんが修理したのではないか。
- ⇒竹島で1個アワビをとると、その下にもその隣にもたくさんあった。
- ⇒隠岐ではあちこち探さないとアワビは見つからなかった。
- ⇒浅いところ（ワカメが生えている場所）は2～3mと資料（※八幡昭三さん提供資料）にはあるが、昭和29年に竹島へ行った人によると、2尋半～3尋（※1尋＝約1.8m）（＝約4.5m～5.4m）のところにワカメがあった。ワカメが横にものびていた。昭和29年の渡航時には、ロープのかわりに、ワカメで船をつないだこともあった。
- ・ワカメが赤くないということ（※八幡昭三さん提供資料）は、漁期が適性であったことを示している。
 - ・ワカメは、漁期を逃すと、先から枯れてしまう（赤くなってしまう）。
- ※伊三郎さんの日記によると、アシカ猟の始まる6月より前に出かけ、アシカ、アワビ、サザエのほか、ワカメなど、竹島で多角的な漁業経営をしようとしていた意図が読み取れる。
- ・ワカメのような海藻はアワビ、サザエが好む。
 - ・アラメはかたくて、アワビ、サザエは好まない。
 - ・ワカメが無くなると、「磯焼け」してしまい、アワビ、サザエもいなくなってしまう。

○平成26年度第4回調査（9月20日～22日）

青田まりえさん聞き取り

森山秀之助氏の経営した森山缶詰について、秀之助氏の次女である青田まりえさんに聞き取り

●森山秀之助氏について

⇒八幡伊三郎氏の日記に出てくる。竹島に行き、サザエの缶詰を作った昭和13年は、26歳となる。

⇒森山秀之助氏は、昭和19年以前に京都の竹中缶詰で勤めていた。竹中缶詰では缶詰技師の資格をとった。その後（戦前）に隠岐で缶詰工場を経営した。竹中缶詰工場の隠岐工場という形で経営した。

⇒父が竹島に行ってサザエ、アワビをとった話を聞いた。竹島のサザエ、アワビは大きかったと聞いた

⇒お姉さん（手崎りえ子さん）の話（電話で対応）によると、父は竹島には何回も行った。竹島には1人でも行ったことがある。竹島では食べるもの（＝魚）には困らなかったとのこと。また、お姉さんの話によれば、工場の写真や、秀之助さんを含めた従業員さんを写した写真、韓国へ行った時の写真（※竹中缶詰は朝鮮半島に工場があった）があるとのこと。

⇒記憶では、工場はあったが、自分が物心ついた時には工場はやめていた。

⇒工場ではぼたん工場もしていた。缶詰工場の後で、ぼたん工場をしていたかもしれない（⇒今後姉の手崎さんに直接確認する必要がある）。

⇒父は水産高校の出身であった。水産高校には、缶詰の学科があったので、水産高校の生徒が工場に来て、実習・研修していた。

⇒工場は後に、雪の重さでつぶれてしまった。

⇒父は、自分が小学校5、6年の頃には、安来の缶詰工場で働いていた。

⇒父は戦前韓国に行っていたこともあった（※竹中缶詰は朝鮮半島に工場があった）母（トミ子）や兄（隠岐で5歳の時）も一緒に行ったという。

⇒工場では、母が事務をしていた。事務員は3名ぐらいいた。

西郷の豪商古木家の資料調査

隠岐の島町で整理した資料のうち、竹島関係の資料を調査

●「大正元年ヨリ土地建物売渡証書」

⇒このうち昭和5年10月19日「土地交換証書」（東町の町有地と古木百一家所有地を交換）に「財産管理者西郷町長中井養三郎」と記載あり

●「昭和八年金銭出納帳」

⇒このうち昭和9年4月26日に「中井養三郎出壺円香奠」とある

●「昭和八、九、拾年雑費記入帳」

⇒このうち昭和9年4月26日に「十六日一、壺円中井様香奠」とある

●「昭和五年前田上ミ店附込帳」

⇒このなかに、竹島関係として、神福丸（竹島への運搬用漁船）の記載がある

●（大正12年）「投資之架」

⇒竹島の関係者として、中井養三郎氏と長男養一氏、石橋松太郎氏と長男勝男氏、

八幡長四郎氏が出ている。

※隠岐島前・島後の資産家 676 名などを記した記録。土地に課税した地租関係の資料と考えられ、田畑、山林を多く持っていた当時の資産家の課税金額が書かれていると考えられる。そのなかに、西郷の中井養三郎氏、その長男養一氏、山田の石橋松太郎氏とその長男の勝男氏が資産家として出ている。

※竹島漁労のパイオニアである中井養三郎氏、石橋松太郎氏の資料は、隠岐ではほとんど残っておらず、竹島漁労で成功して資産家となった状況が確認でき、その意味で大変貴重な資料である。

中西久子さん聞き取り

前回調査した奥谷壽久さんの姉、中西さんに追加調査。

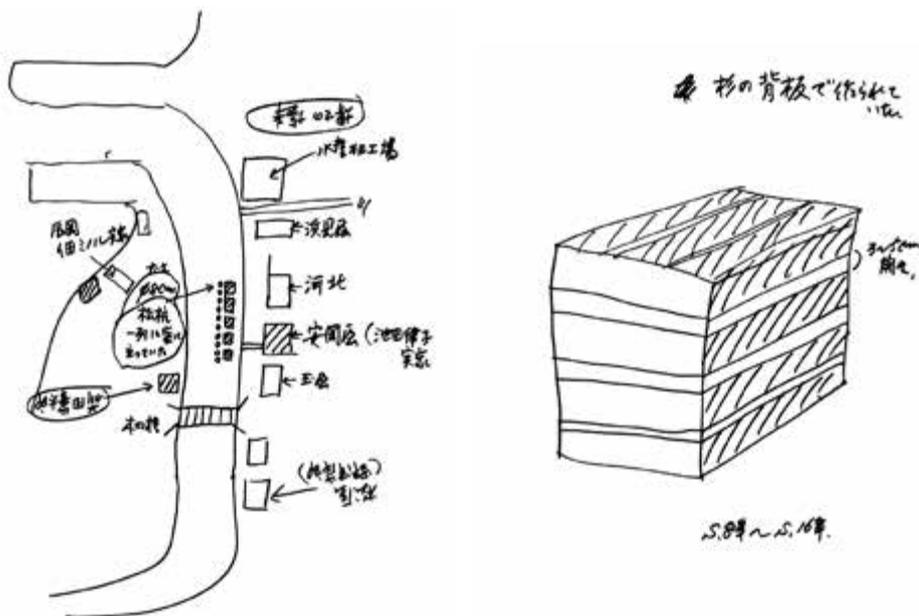
- トド（＝アシカ）の入った大きな箱は、4,5 箱置いてあった。
- 箱は、1 週間から 10 日程度置いてあった。
- 屋号新道（＝吉田重太郎家）の裏が入り江になっており、そこに箱が置いてあった。
- 箱は岸壁から見た。岸壁から伝って見に行った。箱は海水につかっていた。
- トドの箱が海岸に来ると、「トドが戻ってきた」と言って見に行った。
- いつも竹島に行っていた都田佐市さんから、毎年トドの油の傷薬をくれた。
- 都田さんが乗っていた船、神福丸は西郷ではウタセ（刺し網）をしていた。
- トドの油の傷薬は、1 斗缶でもらっていた。
- 西郷西町にあった総合病院である長谷川病院と都田佐市さんが懇意にしていたこともあり、長谷川病院では、トドの油の傷薬を出していた。
- トドの油の傷薬は、傷薬、やけどに使用していた。
- トドの油の傷薬は、玄関においていた。
- トドの油の傷薬は、西郷ではなく、現地（竹島）で作ったと思う。
- トドの油の傷薬は、近所にも分けていた。
- トドの油の傷薬をつけると、傷は早く治った。
- トドの油の傷薬はどろんとしていた。
- 上記の話は、10 歳前後のことだと思う（※昭和 13 年前後のこと）
- 父（奥谷榮吉）から聞いた話では、都田佐市さんは神福丸から、後に父の船である昭徳丸に乗った。
- 他に竹島からの土産として、貝殻（「ボンベ」という＝ボベ貝のこと）があった。富士山を逆さにしたような大きさだった。貝殻は、遊びに使ったりした。貝殻 10 個ぐらいもらった。貝殻は都田さんからもらった。

前田緑さん聞き取り

久見河口にあったアシカの檻等について聞き取り。

- 久見川の近くに住んでいた。（別添地図参照）
- アシカの思い出
 - ⇒小学校（昭和の初め頃） アシカを棒でつつく。
 - ⇒おり（6 個ぐらい）にアシカがいた。
 - ⇒おりは川の水につかっていた。（8 分目ぐらいまで、水につかっていた）

- ⇒おりの近くには、直径 8cm ぐらいの杭があった。
- ⇒杭の内側におりがあった。
- ⇒右岸：水産加工場→浜見屋→川北→安岡屋（池田律子）→玉屋
- ⇒左岸：エビスさん佃ミノル（辰岡）
- ⇒杭は安岡屋から川北まで、びっしりあった。
- ⇒松の杭は家の基礎などに使う。岸壁にも使用していた
- ⇒おりは、杭にしばってあった。
- ⇒おりには、少しだけ隙間があった。
- ⇒アシカにエサをやったのは見たことがない。
- ⇒アシカは、釜屋のじいさんが管理していた。
- ⇒おりのなかにいるアシカを竹の棒でつついて遊んでいた。
- ⇒おりの隙間は板で打っていた。おりには隙間があまりいなかった。
- ⇒おりの隙間には、杉の背板で打ち付けていた隙間は 3~5cm 程度しかなかった。
- ⇒水際から棒をつついていた。
- ⇒棒でアシカをつつくと、大きな声を出すので、喜んでいた。
- ⇒原田でお手伝いとして働いて久見に戻った後（14 歳）、水産加工場（塩辛を製造）で働いた。
- ⇒アシカを見たのは秋。春の記憶がない。
- ⇒アシカは、子供のアシカ、大人のアシカの両方を見た。
- ⇒アシカを棒でつつくのは、兄弟でやって遊んだ。
- ⇒棒でつつくと、アシカがすごく怒っていた。
- ⇒アシカは、ツヤのある毛並みですべすべだった。薄茶色だった。
- ⇒アシカの見張り番（監視人）は浜垣さんでエサやりをしていた。
- ⇒見張り番は朝から晩まで監視していることはない。
- ⇒前田峯太郎氏は幼いころ細々とかなぎ漁をしていた。



②昭和初期の竹島漁撈の実態

これまでの文字資料、聞き取り、民俗資料の調査により、昭和初期の隠岐漁民による竹島漁撈の全体像がようやく明らかになってきた。

昭和初期には、竹島の漁業権を持っていた五箇地区の久見のほか、アシカ猟には西郷地区の漁民、かなぎ漁には、津戸、蛸木、加茂等の漁民が関与していた。また、竹島へ往復する船は、西郷の漁船（発動機船）がチャーターされ、久見でカンコ船（小舟）を積んで11時間半から14時間をかけて移動していたことなど、島後各地の住民が竹島漁撈に関与していた。また、竹島におけるアシカ漁とカナギ漁は完全に分離していたわけではなく、相互に補完して漁撈活動が行われていた。また、森山缶詰による竹島のサザエの缶詰加工、アシカ漁師やかなぎ漁師によるワカメ刈りなどが行われるなど、アシカ漁・カナギ漁だけでなく、竹島を舞台として多角的な漁業経営が営まれていた。竹島でのカナギ漁によるアワビ等の漁獲量は、現在の隠岐の島（久見）のそれと比較しても非常に多く、当時の水産資源の豊富さが伺える。さらには、ランコ土産（土産が具体的に何であるか日誌には出ていないが、聞き取り調査では、竹島のお土産として、アワビなどの貝殻、ワカメなどが配られたとしているので、それらの可能性が高い。）、上子祭への供物の奉納など、竹島が久見地区住民の生活圏であったことが伺える。

③おわりに

近年、隠岐の島町民で実際に竹島に渡航して漁業（アシカ漁など）に携わった方は相次いで亡くなっており、確認できる限り全ての方が他界されている。更にはその方々から竹島の話や直接伝え聞いている子孫や関係者も益々高齢化している。竹島に関する記憶や記録の消滅が現実味を帯びる現状にあって、地元隠岐の島町では、これらの証言や資料等を収集しつつ、後世に伝え残す取り組みが急務となっている。

領土問題は国家の主権に関わる問題であり、一朝一夕に解決することは難しい。しかしながら国への働きかけや主張は、これからは続けなければならない。それゆえ、如何に竹島と隠岐の繋がりを継承していくか、それらを色濃く残すことができるかが重要となる。

「今ならまだ『竹島の話』として残すことができる。これを『竹島物語』にしてはならない。」我が町の松田町長の言を指針とし、今後も調査に邁進したい。